

DAY Award 2022 *Distinguished Alumni of the Year*

受賞者略歴 (敬称略、卒業年順)

並木 浩一 NAMIKI, Koichi 1958年人文科学科卒 (2期)

1935年に横浜に生まれる。1958年ICU人文科学科卒。1964年、東京教育大学文学部大学院博士課程を経てICU人文科学科助手となる。1981-2001年、ICU教養学部教授および比較文化研究科教授、2001-06年、大学院教授、。旧約聖書学、宗教学などを担当。この間、キリスト教と文化研究所長(6期)、大学院部長(3期)、名誉教授。比較文化研究科の設立(1976年)に努力し、学位論文主査(9件)を勤める。日本旧約学会会長(6期)、日本基督教学会学会名誉理事(2009~)。学内刊行物『ICUのキリスト教理念』(Issues of ICU Vol.4)、他2点。著書『ヨブ記注解』2021年、他十数点。

東 哲郎 HIGASHI, Tetsuro 1973年社会科学科卒 (16期)

元東京エレクトロン(株)会長・社長。ICU時代は哲学、経済史を主に学び、ICU卒業後は東京都立大学大学院(日本経済史)へ進学、研究者を志す。しかし、4年間大学院に在籍後、27歳で当時のベンチャー企業である東京エレクトロン(株)に入社。46歳で社長に抜擢され、同社を世界的半導体製造装置メーカーへと大きく成長させた。他に日本並びに世界の業界団体会長を務めるとともに、経産省の半導体・デジタル産業戦略検討会議議長等を歴任。2020年春の叙勲で旭日重光章を受賞。2021年4月には日本経済新聞『私の履歴書』を同窓生として初めて執筆した。

平井 一夫 HIRAI, Kazuo 1984年社会科学科卒 (27期 ID83)

1984年に株式会社CBS・ソニー(現株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント)入社。1995年よりゲーム事業の北米責任者を務め、2007年に株式会社ソニー・コンピュータエンタテインメント(現株式会社ソニー・インタラクティブエンタテインメント)社長兼グループCEO就任。2012

年 4 月にソニー株式会社（現 ソニーグループ株式会社）社長 兼 CEO に就任し、ソニーグループ全体のビジネスを牽引。2018 年 4 月より 2019 年 6 月まで会長を務める。2019 年 6 月よりソニーグループ株式会社 シニアアドバイザーに就任。

井伊 雅子 II, Masako 1986 年社会科学科卒 （30 期 ID86）

一橋大学国際・公共政策大学院教授（アジア公共政策プログラム ディレクター）ICU 教養学部社会科学卒業、ウィスコンシン大学マディソン校 Ph.D (Economics) 取得、世界銀行調査局、米州開発銀行、ボリビア政府企画庁、横浜国立大学経済学部助教授、一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授を経て現職。学術会議会員、財務省財政制度等審議会委員、政府税制調査会委員、日本放送協会経営委員などを歴任。エムスリー社外取締役（社外監査等委員）、三菱重工社外取締役（社外監査等委員）

大久保 真紀 OKUBO, Maki 1987 年語学科卒 （30 期 ID86）

朝日新聞編集委員。1963 年生まれ。87 年朝日新聞社入社。支局勤務を経て、東京本社社会部などに在籍。中国残留邦人や虐待を受けた子ども、冤罪被害者など「声なき声」に耳を傾ける取材を重ねる。鹿児島総局次長として取材を指揮して警察の違法捜査を明らかにした志布志事件報道が 2007 年度早稲田ジャーナリズム大賞、取材班キャップを務める「子どもへの性暴力」シリーズが 20 年度新聞労連ジャーナリズム大賞。21 年度日本記者クラブ賞受賞。著書に『中国残留日本人』『児童養護施設の子どもたち』『献身 遺伝病 FAP 患者と志多田正子たちのたたかい』『ルポ 児童相談所』など。

大塚 桃奈 OTSUKA, Momona 2020 年アーツ・サイエンス学科卒（64 期、ID20）

株式会社 BIG EYE COMPANY・Chief Environmental Officer。1997 年生まれ、湘南育ち。「トビタテ！留学 JAPAN」のファッション留学で渡英したことをきっかけに服を取り巻く社会問題に課題意識を持ち、長くつづく服作りとは何か見つめ直すようになる。ICU 卒業後、徳島県・上勝町へ移住し、2020 年 5 月にオープンした「上勝町ゼロ・ウェイストセンター」に就職。山あいにある人口 1,500 人ほどの小さな町に暮らしながら、ごみを切り口に循環型社会の実現に向けて伴走中。

DAY 受賞者より同窓生へのメッセージ

並木 浩一 NAMIKI, Koichi

68 年前に私は ICU に入学しましたが、それは家業を継ぐことを 4 年延ばしただけでした。4 年になると、その一年が学問と付き合える唯一のチャンスだと認識し、当時、新約学の先端を走っていたドイツ語文献との取り組みに熱中しました。卒業後、私は父との約束で一年近く家業に就きましたが、気乗りのしない仕事への従事は自分にも周囲にもよくないと見極めて家を出て、東京教育大学大学院の倫理学科に入学しました。しかし直ぐに倫理学の限界を悟って旧約学へと転向し、以後、今日まで旧約学を専門としています。当時、私は言語学科の教員であった関根正雄教授に個人的に師事しましたが、その傍ら、学問とは結局自分で開拓するものだと自覚しました。

聖書学は専門的叙述によっては現代性を持ち得ません。昨年に刊行した『ヨブ記注解』は注解の仕事に終始せず、現代の問題に人類がどう対処すべきかの課題に注意を払いました。誰かが、これはリベラル・アーツの視点からのヨブ記注解だと評するならば、私は喜んで同意します。人類的な関心を専門分野での研究に活かすのは楽ではありませんが、文化形成への参与には不可欠です。私は初期の ICU で教えたプリン・ジョンズ先生による激励 “Pioneer, O Pioneer !” を今なお忘れることができません。リベラル・アーツの感覚を ICU で養ったことは私の貴重な財産です。

私は自分の学問形成が不確かな時期から国内の幾つもの学会の実務の仕事や運営を担い、諸教会の支援や教区の研修会にも関わってきました。しかし当然ながら私の最大の仕事は ICU での教育活動でした。私が教えたというよりも、学生諸君と一緒に学んだと言うべきでしょう。教室の外の活動では、ICU 生、東京神学大学の学生と牧師たちを交えた毎夏の合宿が有意義でした。

教授会成員としての私の仕事から選択すれば、大学院比較文化研究科で学生たちの関心を広げたこと、ICU のキリスト教理念検討委員会の報告書を作成し、Issues of ICU シリーズに採択された二つの冊子を執筆したことが重要でしょう。私はその仕事の中で、ICU でキリスト者教員と非キリスト者教員と一緒に働くための共通理解として 5 点を指摘しました。中でも、マイリティであることを引き受けることの合意は最も実践的な項目です。これは ICU を卒業する学生たちには今も、今後も重要な信念であると、私は信じています。

東 哲郎 HIGASHI, Tetsuro

この度の DAY 賞受賞に際し、関係者の皆様に御礼申し上げます。突然のことで、私自身、大学の知名度、魅力度を上げることに、それほど貢献したとは思っていませんでしたが、私が好きな ICU が選んでくれたこと、素直に喜んで、いただくことにしました。

私の家は、井の頭公園のすぐ南側にあり、買い物等、ちょっと出かけるとなると、必ず公園を横切り池の七井橋を渡ることになります。先日 1 月末、寒い冬の合間にポカポカした陽気となり、妻と買い物ついでに公園を、散歩したら、今年初めて、梅の木が白と赤一本ずつ花を咲かせていました。あまりいいニュースを聞かない昨今ですが、自然は春に向かって準備を始めていました。その後池に沿って歩いていくと、例年よりかなり多い数の水鳥が、池に浮かび、気持ちよさそうに日向ぼっこをしていたり、あるペアは頭を池に突っ込み、おしりを垂直に空に向けて、昼食用の餌探しをしていました。武蔵野ののどかな風景のひとつでした。

わたしと武蔵野との出会いは、今から 55 年前、高校三年の時、友人と一緒に大学探しをかねて、ICU に見学に来たときにはじまります。それまでは、ICU も知らず、武蔵野にも馴染みのない私でした。富士重工前のバス停を降り、まっすぐの広い桜並木道を歩きキャンパスに着くと、今まで経験をしたことのない異次元の空間が広がっていました。正面の教会、左側雑木林の中の学生寮、右には芝生のくぼ地に立つ白い図書館、その奥には本館、その前には小さな丘とだだっ広い庭が芝生に覆われて広がっていました。暫く呆気にとられました。土曜日の午後、芝生にのんびりと座っている学生や、輪になってバレーボールをしているグループ、その中の半分は留学生で和気あいあいと楽しんでいました。ここは一体どこだ、何か時間の流れが止まったような感覚になりました。一瞬にしてこの大学に強く惹かれました。その後の人生を振り返ると、ここが私の分かれ目だったように思います。

ICU そして武蔵野の地で育まれた人間関係と経験、友人との出会い、先生との出会い、そして妻との出会い、生きることへの向き合い方、さまざまなことが、この時代に凝縮され、ここから始まり、今に至っています。私の妻は大学は違いましたが、生まれた時から武蔵野で育ち、ICU にはよく遊びに来ていたとのこと。ICU の友人とともによく彼女の家に遊びに行きました。お母さんは非常に心の広い優しい人で、我々をいつでも受け入れてくれました。私にとってはヘルマン・ヘッセのデミアンに登場する不思議なお母さんのようなイメージでした。ICU の思い出と経験を綴ると枚挙にいとまがありません。

ICU の当時の友人や先輩そして先生とは今でも親交が続いています。私のアドバイザーをしていたいたギリシャ哲学の川田先生やトーマス・アクィナスの研究されていた岡野先生ともよくあっています。川田先生は 90 歳になりますが、佐久にある家にお邪魔すると、学生時代の講義の時のような声で、元気に話され、50 年の歳月が一気に飛んで行ってしまいます。川田先生は ICU 創立の時の最初の学生でもあります。長くもあり、短くもある ICU の歴史は、このような人と人との積み重ねの上で形成されていくように思います。

ICU を卒業し、その後 ICU で日本経済史の講義をされていた水沼先生を追うように、都立大大学院に進み、その後 27 歳で、東京エレクトロンに入社しました。今では半導体製造装置の世界的なメーカーとしてなくてはならない存在となりました。私が入社したときは社員が 200 人、平均年齢が 28 歳、経営陣は皆 40 歳前後の若い会社で、火の玉集団とも呼ばれ、日本の古い体質から解放されたエネルギーに満ちた会社でした。それから 40 数年にわたり私は半導体産業に従事し、今に至っています。

DAY 賞受賞のお礼を兼ねて、私の ICU の思い出とその後の私について簡単に触れました。同窓会が、ICU の良き文化と風土をさらに築き、守っていただくことを期待しています。

平井 一夫 HIRAI, Kazuo

2019 年に会社を「卒業」して以来、私は様々な会社や団体、学校から数多くの講演依頼を頂く。講演のテーマは「企業再生のリーダーシップ」、「DX 時代のリーダーシップ」、「事業改革のリーダーシップ」と「何々の」は違うものの常にリーダーシップ論についての講演内容になる。確かに官民を問わずほぼ毎日のようにマスコミは「リーダーシップの弱さやその欠如」を指摘する記事や論調を目にする。

自分の商売の（とは言っても講演料は全額寄付しているが）種明かしになってしまうが、実は「何々の」に依頼主が如何なるテーマを入れて来ても講演内容はほぼ同一で事足りてしまう。つまりリーダーシップそのものはいかなる分野、場面、問題であってもその根本は変わらないのである。そしてリーダーシップ論と言えば、一般的にはいかに IQ を高めるかが議論されるが、私が一番重視しているのは IQ ではなく、むしろ EQ（心の知能指数）である。つまりいかにリーダーとして深い知識と多い経験、戦略立案力や問題解決力が備わっていても、そもそも周りの人からリーダー以前に一人の人間として尊敬されていなければ本当に意味で組織は力を発揮できないのである。知識を高めるための勉強も大事だが、それよりもっと大事なものは EQ をいかに高めるかである。

EQ については多数の書籍があるので詳しい説明は割愛するが empathy、つまり相手の立場になってその人の考え方や主張を理解、リスペクト出来るかが大事なポイントの一つになる。最近「多様性」という言葉が様々な場面に登場するが、真に多様性を理解していなければ empathy を感じることもできない。

ICU は私が学生だった 1970 年代後半、1980 年代初めのころからあらゆる多様性がすでに built-in されており今から振り返ると素晴らしい教育環境がすでに構築されていたのだ。その多面的な多様性の中で培われた empathy は私のその後のキャリアで果たした役割は計り知れないほどに大きいものがあるのと同時に自分がいかに恵まれていた常に考える。

私の大好きなフレーズ「Let's agree to disagree」、この一言がいかに大きな世界への扉を開いてくれるか・・・これからは ICU には高い IQ のみならず高い EQ も兼ね備えた学生を世界に排出することを期待してやまない。

この度は DAY に選んで頂き本当に有難うございました！受賞者の名に恥じないように今後も精進するのみです。

井伊 雅子 II, Masako

大学に行くならば ICU と思っていた高校生でした。高校 1 年生の山岳部の夏山合宿に同行した先輩（女性）が ICU 生でした。槍ヶ岳や穂高を縦走しながら、学生生活の話を聞いて、平凡でない学びができるのは ICU だと確信したのです。

ICU では期待通りに、さまざまな出会いや学びがありました。国際機関で働く先輩たちや、国内外の著名な国際人の話を聞く機会が多くありました。一方で、そうした華やかな世界に憧れて入学した私には、思いがけない出会いもありました。良い本を出版しようと奔走している先輩、国内外の障害者や貧困者など困っている方たちのための活動をしている先輩たち。当時はまだ珍しかったそのような草の根の活動に従事している方たちの話を聞く機会がキャンパスの中で身近にありました。

日常でそのような刺激を受ける一方で、学問に対する好奇心と情熱をかき立てられる 4 年間でもありました。

一年生の英語の講義では、多岐にわたる分野のエッセイ、小説、論文を毎週大量に読み、英語で新しい知識を得る楽しさを覚えました。Leonard Bernstein のエッセイを読んだときは、音楽好きな先生がキーボードを教室に持ち込んで解説をしてくれたこと、Steele 先生の幕末の日本史の講義では、高校までの日本史と違う見方を学んだこと、スコットランドなまりの英語で Picken 先生から哲学の講義を受けたこと、Betty Friedan の『Feminine Mystique』を読んだときには、英語よりもその背後にある思想が全く理解できず七転八倒、Graham Greene の『第 3 の男』や、『炎のランナー』が課題図書になったときには、映画の力も借りたこと。ICU の英語教育では、音楽、絵画、宗教、現代思想などを学びながら色々な視点から物事を考えるトレーニングにもなりました。

英語の講義以外でも、当時の講義の内容は昨日のように思い浮かべることができます。自分の研究の面白さや素晴らしさを学生たちに伝えたくてたまらないという先生たちとの出会いがありました。斎藤和明先生の英文学、武田清子先生の日本の近現代の思想史、川島重成先生のギリシャ古典、古屋安雄先生のキリスト教概論、Kidder 先生の西洋美術史、大塚久雄先生の西洋経済史など。一つ一つの講義のエピソードが思い浮かびます。受講していない講義からも学びました。2 限の講義を受講するために教室に入ると 1 限の講義の熱気が教室に充満していて驚きました。井上和子先生の言語学概論の講義でした。

そしてクライマックスは ICU 二期生の雨宮健先生との出会いでした。スタンフォード大学からサバティカルで1年間 ICU で講義を担当されました。当時の日本ではどの経済学部でも学ぶことのできない最先端の計量経済学と統計学を ICU で学びました。米国の大学院に留学をすると、雨宮先生の教科書が全米のみならず、世界中で使われていることを知りました。そして、経済数学の教科書は、ICU 一期生の高山晟先生の教科書が使われていました。誇らしく思いながら大学院での勉強に励んだことを思い出します。

最近話題の多様性、国際性は、40年前のICUではすでに当たり前のことでした。私の専門である医療経済学と医療政策は、経済的な側面だけでなく、倫理、文化、歴史などの洞察も不可欠です。夢中で様々な分野の本を読み、先生にたくさんの質問をし、学年を超えた仲間たちと議論して世の中のことをいろいろ考えた4年間でした。今回DAY賞受賞で、ICUでの多くの学びを振り返り、自分が受けた素晴らしい教育に改めて深く感謝をしています。

大久保 真紀 OKUBO, Maki

「すみません、何がおもしろいのですか？」

勇気を振り絞って、隣の人に聞いたことをいまでもはっきりと覚えています。ICUに入学したばかりのとき、N館の当時一番大きかった大教室で、1年生全員がそろってのオリエンテーションだったかと思えます。教壇で Non-Japanese の先生が英語で何かを話しているのですが、私にはちんぷんかんぷん。ときおり、周囲の同級生たちがみな笑うのについて行けず、恥を忍んで隣の人に声を掛けたのでした。

「場違いな大学に、間違っって入ってしまった」と焦りまくりました。そんな出来損ないのICU生だった私を、DAY 賞に選んでいただき、心より感謝を申し上げます。

高校までは水泳競技に打ち込み、学校とプールを往復するだけ。インターハイや日本選手権に出るだけの選手でしたが、毎日計7～8キロメートルに及ぶ朝晩の練習でクタクタになり、英語の勉強はもちろん、読書をしたこともろくにありませんでした。そんな私にとって、ICUは自分がいかに何も知らないかを知る場となりました。学ぶ喜び、出会う喜び、知らない世界に足を踏み入れる喜び、挑戦する喜び。私の生きる世界を一気に広げてくれたのがICUでした。

花びらが散り始めた満開の桜に迎えられた入学式では、新入生一人ひとりの名前が呼ばれ、「世界人権宣言」に基づく誓約書に署名をしたことが深く心に刻まれました。当時は人権宣言がなんたるかはほとんど知りませんでしたが、一人ひとりが個として大事にされているという実感、「世界人権宣言」の宣誓という行為そのものが、その後の私の歩みに、影響を与えたと感じています。

漠然と英語が話せることへの憧れがあり、機会があつて訪れたキャンパスに魅せられ、ICUを志望しました。通っていた関西のふつうの県立高校の同級生に「ICUに行く」と言うと、「外国の大学に行くの？」と言われ、「いえいえ、国際基督教大学」というと、「シスターになるの？」と聞き直されました。合格するわけがないと思っていたICUに入ることができたのですが、入学後に受けたカルチャーショックは、3年次に交換留学制度を利用して渡った米国・テネシー州立大学での初めての留学生活より、大きかったというのが正直なところでは。

授業中に学生が足を組み、紙コップのコーヒーを飲みながら先生に質問をする姿、生徒が先生を評価するシステム、セクションメイトや先輩たちのキャラや言動、Non-Japanese がたくさんいるキャン

パス、多くの学生が利用していた図書館とD館、チャペルアワー……。 「純ジャパ（純粋なJapanese）」で水泳の世界しか知らなかった私にとっては、見るもの、体験するものすべてが、さまざまな価値観との出会いであり、驚きの連続でした。

朝日新聞の記者になって34年が過ぎました。記者になりたいと思い定めて挑んだ就職活動も、1年目は朝日も含め受けた新聞社は最終面接ですべて落ち、卒論を出さずに学校に残りました。当時は、既卒になると女性は一般企業への就職が難しいと言われていたからです。親に反対されたため、5年目は毎日証券会社でアルバイトをして自分で学費を稼ぎ、留年しました。やるだけやってダメなら方向転換、と心に決めて挑んだ2年目に、なんとか朝日新聞に拾ってもらいました。足踏みをしたこの間は就職担当の職員の方に励ましていただきました。「本当に自分は新聞記者になりたいのか」と自問し続けた1年でしたが、その自問があつてこそ、記者の仕事をする中で困難にぶつかり転んでも起き上がってこられました。人生に無駄なことは何もないと実感しています。

私は編集委員として、いまでも日々現場で取材を続けています。取材の基本は、言うまでもなく、人に会い、話を聞くことです。この仕事には、驚きと気づき、そして感動があります。それを読者の方々に、社会に伝えたいと、愚直に取材を続けてきました。私が興味を抱いて取材する対象は、なぜか中国残留日本人孤児や売春宿に売られたアジアの子どもたち、虐待を受けた子どもたちなど社会的に弱い立場にいる方々が多いのですが、その背景にはICUでの学びや体験があることに改めて気づかされます。

ICUの卒業生には報道機関に進まれた方が数多くいます。著名な方々が多い中、私のような者を選んでいただき、本当に恐縮しています。DAY賞の名に恥じないよう、今後も精進して参りたいと思います。

国木田独歩の「牛肉と馬鈴薯」に「吃驚（びっくり）したいといふのが僕の願（ねがひ）なんです。不思議なる宇宙を驚きたいといふ願です」という一文が出てきます。それは、まさしく私の願いでもあります。目の前で起きることを当然のものとは思わず、いつも驚く人であり続けたい。ICUで始まった驚きの旅を、今後も続けていきたいと思います。

ありがとうございました。

大塚 桃奈 OTSUKA, Momona

この度は素晴らしい先輩方とともに名誉ある賞をお贈りいただきましたことに、こころより感謝申し上げますと同時に、大変恐縮しています。このような形で母校より身に余る評価をいただき、光栄に存じます。

ICU でのキャンパスライフを通じて、多様なダイアログを重ねるなかで触れた柔軟なまなざしや出逢ったひとびとの異なる価値観は、これからの暮らしの在り方にあたらしい可能性を与えてくれました。2020 年の春に ICU を卒業したわたしは、暮らしや仕事を新たに自らつくりだしていける環境を求めて、徳島県・上勝町へ希望を胸に移り住みました。上勝町は、四国一ちいさな町で「日本で最も美しい村連合」の 1 つですが、さらにこの町をユニークにする取り組みの一つに「ゼロ・ウェイスト」があります。上勝町は野焼き場や小型焼却炉の閉鎖がつづいたピンチを受け、2003 年に日本の自治体としてはじめて「ゼロ・ウェイスト宣言」を発表し、ごみを出さない政策へ舵を切ったことを機に町一体となって活動を続けています。2020 年 5 月 30 日には、公共複合施設である「上勝町ゼロ・ウェイストセンター“WHY”」が新たにオープンし、わたしの役割はこの施設運営を通じて循環型社会実現に貢献することです。

上勝へ移住をしてもうすぐ 2 年が経ちますが、道半ばで DAY 賞をいただくにはまだ何も達成できていないというのが正直な気持ちです。これまでメディア、学校、国際女性ビジネス会議など様々な場でまちの「ゼロ・ウェイスト」の取り組みを話す機会をいただくなかで、それぞれの質問とひたすらに向き合ってきました。わたしが発したことばによって、小さくも何かアクションが生じたり、あたらしい出会いが生まれている事実をわたしは素直によろこびたいと思います。いまわたしができることは伝えることだと考え、数々の対話やインタビューに応えてきました。しかし、ことばと現実の間には多くのギャップを感じており、こころのなかに迷いや戸惑いが生じることがあります。

ゼロ・ウェイストセンターの活動は、まちの住民が日々行ってきた小さな積み重ねの上にあるものです。毎日の暮らしは、地域なかにある何気ない時間の積み重ねからなりたち、おなじまちとともに暮らすには「他者への理解」が欠かせません。上勝のひとびとがたどってきた道や、日々どんなことと向き合っているのかなど、暮らしの記憶をたどることからまちづくりははじまるのだと思います。まちづくりとは、暮らしづくりなのだと思います。

ローカルやゼロ・ウェイストの活動は、現代社会で見えづらくなったあらゆるものとの関係性を再び見つめ直すきっかけをもたらしてくれると感じます。わたしの人生はわたし自身がつくっていると勘違いしてしまいがちですが、過去からの知恵を受け継ぎ、多くの方の支えや周りを取り巻く自然環境によって生かされていることで、いまの活動がつづけられています。これまで、そとへそとへと、そのことばかりに気を取られてしまっていたが、悠久的な流れの中でつづいてきたものやなくなったものを見つめ直し、まちなかにあるひとの営みを掬いながらこれからのみらいのことを、わたし自身のことばでこれからも考えてつづけていきたいです。

最後になりますが、今日に至るまで勉学を支えてくれた家族をはじめ、先生方や友人、上勝の仲間たち、そしてこれまでの探求のなかで出会ったすべての方に感謝申し上げます